

感動、畏敬の念を扱った道徳教材の指導のあり方

著者	藤田 善正, 俵谷 好一
雑誌名	大阪総合保育大学紀要
号	14
ページ	1-12
発行年	2020-03-20
URL	http://doi.org/10.15043/00000967

〔論文〕

感動、畏敬の念を扱った道德教材の指導のあり方

藤田 善正
Yoshimasa Fujita

大阪総合保育大学
児童保育学部

俵 谷 好 一
Koichi Hyotani

大阪総合保育大学
児童保育学部

本研究の目的は、感動、畏敬の念を扱った道德教材の特質をふまえた道德授業のあり方について、考察することである。以前より、感動、畏敬の念を扱った道德教材を扱う授業はやりにくいという声がよく聞かれた。それは、道德科の内容項目に準拠して創られた教材の多くは行動の規範となる物事の道徳的な評価や行動の善悪を扱う倫理的な問題について考えるのに対して、感動、畏敬の念を扱った道德教材は、自然や人の心の美しさを描いており、それに接することで感動したり、畏敬の念を抱いたりするという美学的な問題であるからである。とりわけ、人の心の美しさを描いた教材においては、教材に描かれた人物の行動を模倣することを求めるのではなく、その人物の行動の動機を考えることを通して、そこに利害・損得を超えたものがあることに気付かせ、人間には、このような美しさを求める心があることに着眼して授業を構築していくことが求められる。

キーワード：道德授業、教材、美、感動、畏敬の念、心情

1. 問題と目的

平成27(2015)年3月に告示された一部改正学習指導要領¹⁾では、内容項目をわかりやすく示すためにキーワードが公的に使われるようになった。その中でも、「感動、畏敬の念」というキーワードは、学習指導要領に「道德」が登場した昭和33(1958)年よりそれに対応する文言が見られる²⁾。小学校では内容項目として「(17) 美しいものや崇高なものを尊び、清らかな心を持つ。」中学校では、「(9) 情操を豊かにし、文化の継承と創造に励もう。自然に親しみ、動植物を愛護し、健全な娯楽や身体に適したスポーツを選ぼう。また、古典を友とし、すぐれた文学、美術、音楽、映画、演劇などを鑑賞し、その伝統を尊び、みずからもその新しい創造に直接、間接に参加して、日々の生活を趣味あり情操豊かなものにしよう。」という文言が見られる。それが、学習指導要領改訂のたびに、文言を少しずつ変えながら、

小中学校の指導の系統性を図って現在のようになっている。内容項目は、その文言が長いため、一般的な呼称例は、学習指導要領に「道德」が登場した頃より使われており、「敬けん」や「畏敬の念」などという言葉によって表されることが多く見られた。

小学校高学年で、初めて「畏敬の念」という文言が登場するが、「畏敬の念」という文言が道德教育のねらいに付け加わり、それに基づいて道德教育の内容が四つの視点に整理されたのは、平成元(1989)年の学習指導要領の改訂³⁾においてである。小学校においては、視点の3「主として自然や崇高なものとかかわりに関すること」の小学校第5学年及び第6学年の3-(3)として、「美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ。」として登場した。ところが、「畏敬の念」という言葉は、宗教的な雰囲気を醸し出す言葉であり、それまで一般的に使われなかった言葉であるために、教育現場になかなか浸透しなかった。

表1 小・中学校の指導の系統性

小学校 第1学年及び第2学年	美しいものに触れ、すがすがしい心をもつこと。
小学校 第3学年及び第4学年	美しいものや気高いものに感動する心をもつこと。
小学校 第5学年及び第6学年	美しいものや気高いものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつこと。
中学校	美しいものや気高いものに感動する心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること。

諸富祥彦は、「人間を超えたものへの「畏敬の念」の道徳授業 小学校」⁴⁾の中で、「畏敬の念」こそ、あらゆる道徳的価値の中で最も重要な価値であると述べており、「畏敬の念」なしでは、ほかのあらゆる道徳的価値は、その価値の重みを失い、軽々しいものとなり、「畏敬の念」があってこそ、ほかのあらゆる道徳的価値がその価値としての重みを取り戻すことができると強調している。また、規範意識の根底には、このような感覚が不可欠だと考えている。しかし実際には、それが「目に見えないもの」であるがゆえに扱いづらく、現場の教師には敬遠されがちであるとも述べている。そして、「畏敬の念」をまずは子どもたちが感知するために、彼らのイメージや体感に圧倒的な迫力と魅力でもって訴えかけるような資料（教材）の開発が重要であると指摘している。諸富の著作では、「畏敬の念」の尊さが述べられており、その考えには首肯できることもあるが、どの価値が高く、どの価値が低いかという価値の優劣については、異論もあるのではないかと考えられる。

行安茂⁵⁾は、「生命に対する畏敬の念」を道徳の授業において指導する際に、着手すべき第一歩は資料（教材）選定であると述べている。そして人物の伝記・語りや芸術作品、私たちの生き方や在り方に深く関わるような出来事などいくつかの例を挙げているが、共通するのは、こうした資料（教材）を通して子どもたちのうちに「畏敬の念」が「こみ上げてくる」、「自然と起こる」、あるいはその「思いに包まれる」という点を強調している。「畏敬の念」を指導する際によい教材を選定することについては賛同するが、同時にその教材を道徳授業においてどのような方法で子どもに与えていくかという点については、さらに教材分析に基づいた発問研究をすることが求められる。

さて、道徳授業において、「感動、畏敬の念」あるいは、それと同義に使われてきた「敬けん」は、教えるににくい、指導しにくいという声は、学校現場ではかなり以前からあり、この問題は、現在に至るまで解決しているとは言えない。

「敬けん」はなぜ教えるににくいかということについて、関 甲太郎⁶⁾は、昭和 63（1988）年、自然環境に恵まれた茨城県新治郡八郷町立恋瀬小学校児童 230 人の調査を通して、低学年は、美しい音楽や絵画、全体をみると、美しいと感じる心が育っていない、などの特徴がみられると述べている。また、共同研究者の斎藤真弓と共に、道徳教育に取り組んでいる学校教員 30 名のアンケート調査を通して、「敬けん」の授業のむずかしい点についてその主なものを次の 6 つにまとめている。

①児童ひとりひとりに、自分の身近な問題として感じさ

せていくことがむずかしい。

②実際の行動に表れないので感受性の度合いがはっきりしない。そのため、授業の組み立てがむずかしい。

③感受性の個人差が、生活環境や体験の多少などによって、かなり大きい。そのため、児童ひとりひとりが感じ取ったことを、他に伝えるににくい。

④日常生活の中で、美しいもの、芸術的なものに接する機会が少ない。また、指導者自身にも、指導の土台となるべき経験や体験が少ないのではないかな。

⑤この内容は、感受性の問題と深くかかわっていると考えられるが、ものごとにあまり、感動しない児童がいて、一律に扱うことがむずかしい。

⑥勤労や友情など身近な出来事に比べて児童ひとりひとりの考え方が他に伝わりにくい。

この調査は、調査に協力した教員の経験的なものであるが、「敬けん」の授業はむずかしいと感じる教員がかなりいる。「それにもかかわらず、「臨教審の答申を受けて、28 項目が精選重点化されるが、敬けんの授業については、今までどおり行った方がよいかどうか」という問いに対し、調査に協力した全教員が、「よい」と答えているのは注目すべき点である。

また、筆者は、道徳科の授業研究会の研究協議会において、参加者の教員より「感動、畏敬の念」を扱った授業について、『「今日は、よいお話を聞いた。」だけで終わってしまうことが多い。」「この教材を使って何を指導して、子どもがどのような反応すればよい授業になるのかわからない。」「現実離れた話では、学んだことが子どもの日々の生活に戻らないのではないかな。」などという声を聞くことがあり、この辺りにも、「感動、畏敬の念」を扱った教材の指導のむずかしさを感じる。

筆者は、関・斎藤が挙げたこの 6 点や筆者が聞いた意見以外にも、この内容項目の指導のむずかしさとして、第 1 に、道徳教育における「善」と「美」の問題があるのではないかと考える。日本の道徳教育の特色の一つとして、倫理学で扱う「善悪」だけでなく、美学で扱う「美」を採り上げていることが挙げられる。そこでは、善と美は両立するかという問題があり、善悪や規範意識だけでは扱えない「愛」や「情」の問題もかかわってくる。

例えば、美術の展覧会などにおいて、「美と道徳の矛盾・対立」が語られることがある。この文脈の中における「道徳」とは、善悪につながる問題である。例えば、美的には価値があるが、道徳的には問題があるとか、逆にポスターなどで、表現は平板で新しさはないが、その作品に描かれた内容は、道徳的には価値があるといったケースである。芸術作品と呼ばれる作品の内容にはしば

しば、残虐なあるいは性的な表現がある。また、戦争さえもが音楽や美術や映像においては美的に表現されることもある。これらの表現が道徳的・倫理的な立場から「善悪」のレベルで非難される時、しばしば芸術の立場からは「表現の自由」ということが言われる。

また、内容項目「節度、節制」「礼儀」「規則の尊重（遵法精神、公德心）」「正直、誠実」のような価値には、こうすべきだという規範がある。もちろん、動機によっては、規則を守らないことや嘘をつくことが例外的に許される場合はあろうが、それに従って生きることが社会生活を送る上でよりよく生きることにつながることが多い。例えば、どこの学校においても、廊下を走ってはならないという規則があるだろうし、それをもとにして生活指導しているであろう。それは、児童が人や物に衝突してけがをすることを防ぐことにつながっている。しかし、廊下や教室に気分が悪くなって倒れている児童がいる場合、廊下を走ってその児童を一刻も早く看護することは、当然しなければならないことであり、それは、決して規則違反としてとがめられることではない。また、嘘をつくことは、多くの場合悪いことであるが、それは人をだましたり陥れたりすることによってその人に不利益をもたらすからである。ただし、例外的に、人を守るためや、人を傷つけないための配慮として嘘をつくことは、必ずしも「悪」と言い切れないこともある。その場合、動機が何であるかが問われる。

また、「友情、信頼」「家族愛」「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」「自然愛護」「感動、畏敬の念」などにおける愛や情は、規範だけでは、完全に割り切れないものがある。「友情、信頼」が大切であることに異論はなかろうが、学級の誰に対しても同じように友情を感じ、信頼することは難しいというのが現実である。しかし、その大切さに気付かせる指導は必要である。また、家族に愛されて育った児童と、家族に虐待されて育った児童が同じ家族観をもつことは難しいが、たとえば、家族関係において恵まれないで育っても、自分が家庭を創るときにはよい家族の人間関係を育みたいという想いを高めることは必要である。

このように、一つ一つの内容項目を掘り下げて考えると、いろいろな課題が見られる。特に、感動や畏敬の念は、そこに描かれた自然や人間の姿などを美しいと感じるかどうかによって大きく変わってくるところに指導の難しさがある。

第2に、これらの教材のうち、人物の行動を描いた文学作品の場合、自然科学的な視点から観ると決してありえないことが描かれているものもあり、それが、教えにくさの要因の一つになっていることもあろう。人の心の

やさしさ・美しさが星や花になったりすることは、物語としては美しくても、自然科学的にはありえない現象である。また、人間と動物が話し合ったりすることや、銅像や地蔵が話したり動いたりすることも物語であるからこそ可能なことである。なお、このような文学作品は、国語科の物語文においても扱われている。それならば、同じ教材を国語科と道徳科で扱う場合、その違いはどこにあるのかということも検討する必要がある。国語科でも道徳科でも教材になっている原作が文学作品である教材をもとにして、その違いを検討する必要がある。

本研究の研究方法については、多くの教科書に掲載されている内容項目「感動、畏敬の念」の代表的教材がこれまで過度に心情重視の指導をされてきたことに対して、本時のねらいは、「～する心情を育む」としながらも、登場人物の思いを問う発問は最小限にとどめて、場面ごとの登場人物の気持ちを問うような発問（例：「このときの〇〇の気持ちはどうでしょう。」）を排している。その代わりに、行動の理由を問う発問を積極的に加えた発問構成にし、その話し合いを通して、より高い生き方について考えを深められるように指導の工夫・改善を図ろうとしている。国語科と道徳科の教材の扱いについては、どちらの教材にも取り上げられた「百羽のツル」をもとにして論じる。さらに、教科書に掲載されている「学習の手引き」の問題点についても触れ、指導書や「学習の手引き」だけに頼らない指導のあり方についても提言する。

2. 道徳教科書に掲載された道徳教材

平成30（2018）年に、全国の小学生に配布された道徳教科書の「感動、畏敬の念」を扱った教材一覧は、表2の通りである。これを見ると、教科書会社が、「感動、畏敬の念」を扱ったどのような教材をどれだけ採り上げているかを通して、その会社の編集方針の一端を垣間見ることができよう。これらの教材を大別すると、自然の美を描いたものと、人の心の美を描いたものに分けられよう。ところで、これらの教材を指導する上での留意事項は次のようにまとめることができる。

自然の美…虹や星空や御来光（高山の頂上で見る荘厳な日の出）など美しい風景を生み出す大自然の摂理に感動し、人間の力を超えたものに畏敬の念をもつことに対して反対しなくても、それに接する体験をしたことがない子どもは、画像・映像・プラネタリウムのような疑似体験をするだけではその本当の美に気付くことは難しいのではない。授業の導入で電子黒板に映された虹や星

感動、畏敬の念を扱った道徳教材の指導のあり方

空を見て、その感想を述べる実践例は多く見られ、それは一定の効果をもたらすであろうが、学校教育全体を通して実物に接する機会を設ける必要性を感じる。また、教科書には、写真などによって児童の理解を助けるようにしてあるが、教材そのものは、文章によって描かれているために、文章理解の差が教材理解の差になることもあろう。

人の心の美…人物の美しい心や行為が花や星に昇華されることが描かれているが、作品の中で描かれた自己犠牲を「善いこと」としてとらえてよいかという問題がある。また、伝記教材のように実話をもとにしたものと、童話等の創作された文学教材でも、指導のあり方に違いがあると考えられる。また、美は主観的なものであるが

故に、教師が感動したからといって、その感動を児童に押し付けることは望ましくない。また、教師が感動しないような教材は、よい教材と言えないという論が見られるが、これは、教師が感動しないような教材を指導するときには、指導への情熱が湧きにくいというレベルの問題である。また、教材の中で起きる奇跡は、自然科学的に正しいとは言い難い場合もあるが、何よりも教材に描かれた人物の行為を模倣せよというような指導は、避けるべきである。さらに、「感動、畏敬の念」のように最終的には心情面でとらえるしかない部分のある内容項目において、論理的思考を育成する授業は、どこまで可能かという問題もあり、この問題については、具体的な教材を通して論究する。

表2 小学校教科書に掲載された感動、畏敬の念を扱った道徳教材

教科書会社 学年	東京書籍	日本文教出版	光村図書出版	学研教育みらい
第1学年	にじが でた	うちゅうせんにとつて	ひしゃくぼし	七つぼし
第2学年	七つのほし ガラスの中のお月さま	七つの星	かさじぞう	ころきちのバイオリン
第3学年	百羽のツル しあわせの王子	光の星	まわりを見つめて	幸福の王子
第4学年	一びきのセミに「あり がとう」 花さき山	花さき山	花さき山	花さき山
第5学年	ひさの星 そういうものにわたし はなりたい 一本松は語った	母さんの歌	宇宙から見たもの	アルソミトラの花
第6学年	夜空 青の洞門	青の洞門	マザー＝テレサ	美しいお面
教科書会社 学年	教育出版	光文書院	学校図書	廣済堂あかつき
第1学年	七つのほし 見上げてみよう よる の空	ひしゃくぼし	十四ひきの お月見 ぱちん ぱちん きら り	七つのほし
第2学年	しあわせの王子 雨上がりの空に	うつくしいもの、うつ くしいところ しあわせの王子	とべない ほたる 七つの星	しあわせの王子
第3学年	花さき山	花さき山	花さき山 幸せの王子	百羽のつる
第4学年	十才のプレゼント	十さいのプレゼント 百羽のつる	十才のプレゼント ひさの星	花さき山
第5学年	稲むらの火	星が光った	不思議な顔	百一さいの富士 －奥村 土牛－
第6学年	百一才の富士（奥村土 牛）	青の洞門	青の洞門	青の洞門

3. 代表的教材を使った道徳科授業とその留意点

そこで、表2に掲載されている道徳教材のうち、人の心の美を描いたもので、3社以上の教科書会社が採り上げている5つの教材について、その教材を指導する上での押さえどころや、問題点がある場合、それを克服する発問を含む指導のあり方について、論述していく。

① 七つの星^{ほし}（ひしゃくほし・七つほし）…8社掲載

日照りの続く夜に一人の女の子が病気の母親のために木のひしゃくを持って水を探しに行く。女の子が苦しんでいる人物に水を与えるたびに、ひしゃくは銀、金、ダイヤモンドに次々と変わって空に飛び出し、ひしゃく星（北斗七星）になった。

「七つの星」は、教科書によって題名の違いはあるが、どれもレフ・トルストイ原作の童話をもとにして教材化している。文部省の「道徳の指導資料Ⅱ－1－12」で登場して以来、多くの教科書・副読本に掲載されてきた。ところで、この教材に描かれた奇跡の理由を考えさせるような発問をすると、女の子の心の美しさに神様が応えたといった超人的なことが出てくることが考えられる。とりわけ、宗教に関わっている家庭で育った子どもほど、そのような考え方をする傾向があろうが、道徳授業を通して、そのようなことをすべての児童に求めるべきであろうか。たとえ宗教的な情操を育てることは、公立学校でも一定認められるとしても、このようなアプローチを中心に授業展開をするという考えには課題がある。先ず、この教材を通して何を学ぶかを考え、次に、この教材を使った道徳授業のねらいを、どうするかを考える必要があろう。川本サエ子⁷⁾は、この教材を使った授業にあたって、次のようなことを重視している。

－こうした女の子の清らかなにも美しい心情や行為にあこがれを持たせることは、人間の奥底にある清らかなものを、ゆさぶりめざめさせることになる。私たちは、常に、世俗にまみれ汚れてはいるけれど、人間である限り、崇高なものの清らかなものにあこがれる心を持っている。ただ、毎日が世俗的であるゆえに、自己の持つ清らかさを忘れていのである。この話は、現在の現実的・利己的な考えの子どもたちにとっては、あまりにも美しすぎ、理想主義的であるかもしれない。しかし、こうした清らかなにも美しい物語を読み、主人公の行為に感動させることによって、美しいものや崇高なものを尊び、みずからも清らかな心を持つ人間として成長させたいと願うものである。－

また、渡邊達生⁸⁾は、女の子のやさしさを授業のねらいに向かって掘り下げることの大切さを強調し、やさしさのレベルの深さを例示することで、困っている人に尽くしたいという女の子のやさしさが美しさにつながることをわからせようとしている。さらに、この教材を読んで感じた時の気持ちが「すがすがしい気持ち」であることを押さえることや、他の読み物との共通点を見つめさせたり、生活の中において、人のために尽くしたりすることの具体として「家族の看病」などと結び付けて考えさせることの大切さを述べている。

そこで、本時のねらいを次のようにすることで、女の子の心の美しさを感じる心情を育てることに焦点を当てた授業展開が可能となろう。また、女の子が、苦しんでいる人物に水を与えるという行動の理由を考えさせることは、行動を支える心を把握するために必要であり、この教材のより深い理解につながる。しかし、女の子の行為を模倣したりするようなことを求めてはならない。

本時のねらい：教材「七つの星」を通して、美しいものや気高いものに接し、清らかな心を持とうとする心情を育てる。

主な発問例（◎中心発問 ○基本発問）

導入：

○（電子黒板に映された北斗七星の画像を見て）どんなことを感じましたか。

展開：「七つの星」を読んで話し合う。

○ 女の子は、なぜ水をさがしに出掛けたのでしょうか。

○ 「その水を、わたしに飲ませてくれないか。」と旅人に言われた女の子は、どんなことを考えたのでしょうか。

○ 女の子が旅人に水を差し出したのはなぜでしょうか。

○ どうしてひしゃくの色が変わったり、星が輝いたりしたと思いますか。

◎ この話の中であなたが一番美しいと思ったことは何でしょうか。それは、なぜですか。

終末：

○ 女の子に手紙を書きましょう。

② しあわせの王子（幸福の王子）…6社掲載

体は金ばくで覆われ、目や刀には宝石がはめ込まれた「しあわせの王子」は、町の真ん中に遠くまで見下ろせるように立っていた。王子は、生活

に苦しむ町の人々を助けるために、ツバメの手助けを得ながら自分の体の宝石や金ばくを分け与え続けた。王子の体は汚れ、ツバメの死と同時に崩れ落ちたが、天使がツバメと王子の心を抱いて昇天した。

「しあわせの王子」は、オスカー・ワイルド原作の子ども向けの短編小説であり、文部省の「小学校道徳の指導資料Ⅱ－２－１５」として採り上げられて以来、改作されたものが教科書（副読本）に登場した。この教材における王子やツバメの行為を模倣させようという授業をする教師はいないであろうが、この教材を扱う場合、二つの山場があり、そのどちらを重視するかで授業はかなり違ったものになると考えられる。一つは、ツバメが王子のもとにしようと決心するまでのツバメの変容を中心に考える展開であり、もう一つは、天使が神様の使いで町に降りて行って美しいものを探すところである。前者を中心にするならば、本時のねらいは、「ツバメが王子のもとにしようと決心した理由を考えるを通して、自分よりも相手のことを思う心の美しさを感じる心を育てる。」となるだろうし、後者を中心にするならば、「王子やツバメの行為の中に美しさを見出し、清らかさに憧れる心情を育てる。」になるであろう。しかし、前者であるならば、この教材の全体像をつかむことができないと考え、後者を中心にした展開を考えた。なお、この教材は、萩原隆⁹⁾のように、これまで「なぜ」「どうして」という判断を問うようなものは望ましくなく、登場人物の心情をくみ出すような展開が望ましいとされてくることが多かった。しかし、王子やツバメがそのような行為をした理由や、王子やツバメ自身の変容を考えさせるを通して、王子やツバメの心の美しさにふれると同時に、道徳的判断力を育成することも可能になると考える。

本時のねらい：教材「しあわせの王子」を通して、王子やツバメの行為の中に美しさを見出し、清らかさに憧れる心情を育てる。

主な発問例（◎中心発問 ○基本発問）

導入：

○ みなさんが、幸せだなあと感じるのはどんな時でしょう。

展開：「しあわせの王子」を読んで話し合う。

○ ツバメは、最初なぜ王子のお手伝いしようと思ったのですか。

○ ツバメは、手伝っているうちに考えがどのように変わってきましたか。

○ 王子は、本当のしあわせとはどういうものだと気付きましたか。

○ 神様が言った「尊いもの」とは、どんなものだと思いますか。

◎ 天使は、なぜ王子とツバメを天国に連れて行ったのでしょうか。

終末：

○ 自分のことよりも、相手のことを考えて行動したことはありますか。

③ 百羽のツル（百羽のつる）…３社掲載

長く苦しい渡りの旅を続けていた百羽のツルのうち、力尽きて飛べなくなった子どものツルは、みんなに迷惑をかけまいとし、九十九羽のツルは、かけがえない一羽のために心を一つにして助ける。

「百羽のツル」は、花岡大学作の児童文学で、古くより国語の教科書（学校図書３年生）として登場している。当然のことながら、国語授業と道徳授業では、教科としてのねらいが違ふし、数時間の単元構成で指導される国語科と、原則として１時間１主題の道徳では、たとえ同じ教材を使ったとしても、同じ授業展開にはならない。国語科でこの教材を扱う場合は、作者が何を伝えようとしているかに焦点を当てて授業を構築することが求められる。また、この教材を道徳教材とする場合、子どものツルの想いと、九十九羽のツルの想いと道徳的行動の両面からアプローチすることが求められる。その中で、お互いが仲間を想って行動する心の気高さや美しさに感動し、それを大切にしようとする心情を育てる。この教材は、小学校３・４年生の教科書に掲載されているが、この時期の子どもは、遊び仲間集団を形成して、グループで行動する傾向がみられるので、仲間のために自分を抑えようとする子どものツルや、それを放っておけない仲間を思って行動する九十九羽のツルの心の気高さに着眼させると共に、九十九羽のツルがそのような行動をとった理由を考えさせるを通して、この教材のより深い理解につながり、道徳的心情を育むことが望まれる。ただ、自然界に生きているツルは、集団で渡りをすることはあっても、網をつくって仲間を救うような集団行動をとることはないので、この教材は、あくまでも擬人化したものであることを教師はふまえて指導に当たる必要がある。

本時のねらい：教材「百羽のツル」のツルたちの行為を通して、その中に相手を想う心の美しさを見出し、清らかに憧れる心情を育てる。

主な発問例（◎中心発問 ○基本発問）

導入：

- ツルという鳥について知っていることを発表しましょう。

展開：「百羽のツル」を読んで話し合う。

- 百羽のツルたちは、飛びながらどんなことを考えていましたか。
- みんなについていこうとして、死にものぐるいで飛んでいる子どものツルは、どんなことを想っていたでしょう。
- 羽が動かなくなっていて、黙って下へ落ちながら、子どものツルはどんなことを想っていたでしょう。
- ◎ 九十九羽のツルは、どうして子どものツルを助けようとしたのでしょうか。

終末：

- 九十九羽のツルと子どものツルにお手紙を書きましょう。

④ 花さき山…8社掲載

あやは、迷い込んだ山奥でやまばに会い、花さき山の花は村人が優しいことをするたびに一つずつ咲くことを教えられる。だから、花さき山に咲く花は、つらいのを辛抱して、自分よりも人のことを思うと、その優しさとけなげさが花になって咲き出す。

斉藤隆介原作の「花さき山」のうち、道徳の教材となっているのは、その一部分である。八郎湯誕生の逸話まで入れると、子どもの生きざまとはかけ離れた大きな自己犠牲の話となる。なお、文学作品では、愛と自己犠牲を主題として描かれたものが多くあり、国語科では、それを読み解くことが学習のねらいになっていることもあるが、道徳科においては、自己犠牲こそが尊いのだと感じさせるような取り扱いをしないことが求められる。この教材では、時代も違えば、日常生活のレベルからは遠い価値を扱っている。また、つらいことを辛抱することや自分のことより人のことを思うことを「花」に象徴しているが、例えば、「あや」が祭り着を妹の「そよ」に譲ったことを「善」として取り扱ってよいであろうか。あくまでも、それを美しい心が生んだ行動としてとらえさせる必要があろう。「あや」の辛抱する心に、

涙してもよいが、わざわざ発問する必要はないにせよ、「そよ」が、大きくなってそのことを知ったとき、自分はそのとき祭り着をもらってもよかったのだろうかなどと、教材をふまえながらも、そこに書かれていないことを想像してもよいはずである。小宮健¹⁰⁾は、「花さき山の花は、どうして咲くのか。」という発問からは、どうしても子どもの主体性が発揮しにくいと考え、「どんなことなら、花さき山の花がさくと思うか。」と問うことを提言している。しかし、この発問は、自己犠牲を伴う事例の中にあるやさしさや美しさを引き出すことは可能であろうが、発問の難しさから、発問の意味を理解できない子どもが出てくることを危惧する。「どんなことをしたら、花さき山の花がさくと思うか。」といった考えやすい発問を工夫すべきであろう。

ところで、児童の日常生活のレベルに戻すと、いろいろなレベルの親切ややさしい行為が出てくると考えられる。それらを美しい心から発した行動と認めていくことが、自己肯定感（自尊感情）を育むことにつながる。そこで、花はどのようなときに咲くのかを考えることを通して、花に象徴された人の心の美しさに気付かせ、自分や自分の周りにある「花」を探すような授業展開が効果的である。

本時のねらい：教材「花さき山」の「やさしいことをすれば花が咲く」ということについて考えることを通して、自分たちの身の周りにある「花」を見つける意欲を高める。

主な発問例（◎中心発問 ○基本発問）

導入：

- 教材「花さき山」のさし絵を見て、気づいたことを発表しましょう。

展開：教材「花さき山」を読んで話し合う。

- 赤い花が咲いたのはどうしてでしょうか。
- 青い花が咲いたのはどうしてでしょうか。
- 双子のお兄さんがあやよりすごいと思うことは何だと思いますか。
- ◎ 花は、どんなことをしたときに咲くのでしょうか。

終末：

- （美しい行いをした時に花は咲くことを確認した上で）自分たちの周りにある「花」を探して、花の絵に言葉を書いて、木に貼しましょう。

⑤ 青の洞門…5社掲載

父の仇をとろうと20年も了海を追い続けてきた実之助は、ついに了海と出会うが、了海はやせ衰え見るに忍びない姿となっていた。洞門を完成させようとする了海の思いを知った実之助は、了海を手伝い、ついに洞門は貫通する。了海は、実之助に自分を斬れと言うが、了海の美しい心に感動した実之助は、手を取り合って涙を流した。

菊池寛原作の「恩讐の彼方に」を文部省が道徳教材化（小学校道徳の指導資料Ⅲ－6－1）したものである。この教材は、了海を主人公にして考えると、キーワード「希望と勇気、克己と強い意志」の教材として取り扱うこともでき、実之助を主人公にして考えると、キーワード「相互理解、寛容」の教材として扱うこともできようが、この教材の全体像を考えると、人間の愛、献身、努力などのひたむきさに感動する心を育てることを中心に授業を組み立てることが大切であると考え。人間には人間を感動させる美しい心を持っており、「美しい心」とは、一つの目標に向かってひたむきに努力を続ける想いや、人の幸せを願う心である。また、憎しみを赦す心も「美しい心」の現れである。この教材の学習を通して、人の行為の中にある気高さや崇高さを感じ取らせ、人の中にある美しさを尊ぶ心情を育てたいと考える。塚本充¹¹⁾は、「本当に禅海（了海）は罪の償いのために掘り続けたのだろうか。」といった切り返しの補助発問によって、単なる罪滅ぼしではなく、人間尊重の精神に根ざした気高く清く生きようとした禅海（了海）の心に着目する子どもも出てくるであろうと述べているが、このような補助発問は、児童の発言をそのまま受容するだけでなく、より深めるために必要であると考え。このように、この教材では、了海と実之助の心情の変化を問うだけでは不十分であり、特に了海と実之助の行動の理由を問うことが、その深い理解につながると考えられる。

これまでの授業では、実之助の心の変容を追うことが中心になりがちで、それ故に了海が村人のために長年穴を掘っているから許したといった浅い理解に留まっている傾向が見られたが、それと共に、了海は洞門が貫通しても自分の罪は許されるものではないと考えるような人間であったからこそ、実之助は親の仇を許そうという考えに変容したことを押さえておきたい。

本時のねらい：教材「青の洞門」の了海と実之助の行動とそれを支えた心を考えるを通して、美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念を

もつ。

主な発問例（◎中心発問 ○基本発問）

導入：

- 現在の「青の洞門」の写真を見て、見つけたこと、気づいたことを発表しましょう。

展開：教材「青の洞門」を読んで話し合う。

- 了海は、なぜ穴を掘ろうとしたのでしょうか。
- 初めは寄りつかなかった村人たちが、なぜ了海を手助けするようになったのでしょうか。
- 実之助は、はじめ、了海に対して、どんなことを思っていましたか。
- 真夜中、かたきを目前にした実之助は、なぜ洞門の工事を手伝ったのでしょうか。
- ◎ 洞門が完成したとき、実之助はどうして了海の手を握ったのでしょうか。
- 了海は、洞門が完成したら、自分の罪は消えたと思っていたのでしょうか。

終末：

- 「青の洞門」を学んで、初めて気付いたことや考えたことを書きましょう。

4. 「学習の手引き」に掲載された発問の問題点とその克服

ところで、教科書の教材文の前後に掲載されている「学習の手引き」に該当する「考えてみよう」とか「見つけよう・生かそう」あるいは、キャラクターのイラストに語らせている発問例等を見ると、主人公の気持ちを問うものや、価値そのものを問うようなものが多く見られる。この中には、教師の発問づくりのヒントになる場合もあるだろうが、反対に教師の創意工夫を妨げたり、その学年の子どもにとって難しい発問になったりする場合もあると考えられる。また、「感動、畏敬の念」に限らず、道徳の教科化に対しては、「一定の価値観や規範意識の押しつけにつながるものが危惧される」といった反対意見もある。

そこで、道徳の教科書会社8社が全部採り上げている「七つの星」と「花さき山」の手引き（学校図書のように教科書に手引きがない場合は、別冊のノートに記載したもの）に書かれている発問のヒントにつながるものを一覧にしてみると、表3・表4のようである。なお、ここでは、家庭学習の課題として提示した発問例は、省略している。

これらの「学習の手引き」は、道徳が教科化される以

表3 教材「七つの星（別の題名も含む）」に記載された学習の手引き

教科書会社	「学習の手引き」に掲載された発問例
東京書籍	・美しいものを見てさわやかな気持ちになったことはありますか。
日本文教出版	・七つ星（北斗七星）を見たことがありますか。 ・なぜ、ひしゃくは木からぎん、金へとかわり、そこからダイヤモンドがとび出してきたのかな。 ・自分の心の中にあるダイヤモンドをさがしてみよう。
光村図書出版	・うつくしいところとは、どんなところのことでしょう。 ・どんなふしぎなことがおこったのでしょうか。 ・このおはなしのなかで、うつくしいところだなとおもうところはどこですか。それは、どうしてですか。
学研教育みらい	・ひしゃくが、ぎんや金にかわったのはなぜでしょう。 ・うつくしいものをさがして、ともだちにおしえてあげましょう。
教育出版	・うつくしいものやきよらかなものにふれるとこころがときめきますね。それはどうしてなのかかんがえてみましょう。 ・ひしゃくを年よりにわたしたとき、女の子はどのような気持ちだったでしょう。 ・ひしゃくがかわっていったのはどうしてでしょう。 ・うつくしいところとは、どんなところでしょう。
光文書院	・どんなときに、人の心がうつくしいなとおもいましたか。 ・どんなひとのこころがうつくしいとおもいますか。かんがえてまとめましょう。
学校図書	・女の子やお母さんのどんな気持ちから、ひしゃくの色がかわったり、とび出たダイヤモンドが七つの星になってかがやいたりしたのでしょうか。 ・うつくしいな、すてきだなと心をうごかされたできごとをはっぴょうしましょう。
廣済堂あかつき	・このおはなしでどんなことをかんじましたか。 ・「うつくしいな」「すてきだな」とおもったことはありますか。

表4 教材「花さき山」に記載された学習の手引き

教科書会社	「学習の手引き」に掲載された発問例
東京書籍	・花さき山にさく一面の花を見て、あやはどんな気持ちになったのでしょうか。 ・ひとのこころの美しさを感じたことはありますか。それは、どんなことですか。
日本文教出版	・「花さき山」を知っていますか。 ・花さき山に花が咲く理由を聞いたあやは、どんなことを考えたかな。 ・人の心の中にあるすばらしいものや美しいものって、どんなものだろう。
光村図書出版	・花さき山って、どんな山なんだろう。 ・この話を読んで、どんなところに心を動かされましたか。 ・「この赤い花は、どんな祭り着の花もようよりも、きれいだべ。」と言われて、あやはどんなことを思ったでしょう。 ・この話に出てくる人の中から、一人を選んで、その人に手紙を書いてみましょう。
学研教育みらい	・「おまえがきのうさかせた花だ。」と言われて、あやはどんな気持ちになったでしょう。 ・「自分の花」をさがしてみましょう。「あのとき自分の花を咲かせたのではないか」と思うことはありますか。
教育出版	・みなさんは、人の心の美しさに感動したことはありますか。 ・美しいものに感動するのはなぜか考えてみましょう。 ・自分がさかせた花を見て、あやはどう思ったでしょう。 ・花さき山一面に花がさいたわけを知って、あやはどう思ったでしょう。 ・花さき山に花をさかせられる人はどんな人でしょう。みんなで話し合ってみましょう。 ・どうして、人は美しいものに感動するのでしょうか。自分の考えをまとめてみましょう。
光文書院	・心がうつくしいとはどういうことか考えてみましょう。 ・この話を読んで、どのようなことを感じましたか。 ・花さき山の花をさかせられそうな人を見つけて、しょうかいしましょう。
学校図書	・「おらの花がさいているな。」と思うあやは、どんな気持ちでいるのでしょうか。 ・「美しい心」とはどんな心でしょう。
廣済堂あかつき	・物語のどんなところが心に残りましたか。 ・あやは、どんなときに（今花さき山で、おらの花がさいてるな）と思うのでしょうか。 ・花さき山の花が美しいのはどうしてでしょう。 ・あなたが「美しい」と感じる心は、どのような心ですか。

前の副読本から存在し、道徳授業に不慣れな教師の「発問の手引き」にもなっているが、例えば『「美しい心」とはどんな心でしょう。』のように、抽象的な発問があるばかりではなく、導入でこの発問をすれば、多様な意見が出てくる可能性もあるが、かえって、それを問うことで当該の教材から離れていき、その教材はなくてもよいということになりかねない。また、抽象的すぎる発問のため、「わからない。」と答える子どもが出てくる可能性もある。また、「物語のどんなところが心に残りましたか。」という発問は、国語の第一次感想と同じである。そのような発問によって、授業が焦点化しにくくなってくこともある。

本研究では、そのようなこともふまえて、多くの教科書に教材として採択されているもののうち、これまでに実践例がかなりある代表的教材を使って、その教材の特質に合った発問づくりをしたが、本時のねらいが、心情を高めることであっても、場面における主人公の気持ちを問う発問を排した。それは、道徳授業改革理念の一つである気持ちばかり問う道徳授業からの脱却ということもあるが、読んだだけではわからないことが多く、どのようにでも考えられるからである。一方、行動の理由を問う発問を加えた。これによって、思考力や判断のもとになる考えを高める道徳授業をめざした。

5. まとめ

国語科教材にも、物語教材（文学教材）として、愛や自己犠牲を主題にした作品は数多く登場するが、国語科の教材が、その教材を学習した子どもの行動を規制することはない。道徳科の授業では、あくまでもある内容項目に描かれた価値について考えを深める学習であるが、たとえそれが美しい行いであるからと言って、その教材に描かれた行為を即実践することを勧めたり、強いたりする授業であってはならない。

これまで、内容項目「感動、畏敬の念」を扱った授業は、場面ごとに登場人物の気持ちを追って感動を高めるような授業展開が多かったが、このような展開では、児童にとっては、感動的なよい話を聞いたというところで留まってしまいがちであった。

さて、「感動、畏敬の念」のような、最終的には心情面でとらえるしかない部分のある内容項目において、なぜそのような行動をとったのかという行動の理由を問う発問を通して、行動のもとになる動機を考え、ひいては

判断力を高めることが可能であると考えた。そのため、場面ごとの登場人物の気持ちを問う発問はせず、登場人物の思いを問う発問を少なくする代わりに、行動の理由を問う発問を多く採り入れた。しかし、行動の理由を問う発問だけで、教材の理解が完全になるわけではない。あくまでも、心情的理解を補完するためである。また、行動の理由を問うだけでなく、その話し合いを通して、より高い生き方について考えを深められるように指導の工夫・改善を図ろうとしている。

なお、現行の道徳教科書には、多かれ少なかれ、「学習の手引き」が掲載されている。これは、他教科の教科書にも見られることであるが、これに支配されて、教師が発問の創意工夫をしなくなれば、それは、かえってよくないことである。教師は、教材分析とそれをもとにした発問の創意工夫によって、教材をより豊かなものにして、子どもに与える努力をすることが求められる。

文献

- (1) 文部科学省 (2015) 一部改正学習指導要領 文部科学省 平成 27 年
- (2) 文部省 (1958) 学習指導要領「道徳」文部省 昭和 33 年
- (3) 文部省 (1989) 学習指導要領「道徳」文部省 平成元年
- (4) 諸富祥彦 (2007) 「人間を超えたものへの「畏敬の念」の道徳授業 小学校」明治図書
- (5) 行安茂 (2012) 「生命に対する畏敬の念をどう指導するかー他の諸価値との関連をどう考えるかー」行安茂・廣川正昭編著『戦後道徳教育を築いた人々と 21 世紀の課題』教育出版 pp.314-324
- (6) 関甲太郎 (1988) 「敬けん」はなぜ教えるのか 月刊「道徳教育」明治図書 8月号 pp.5-11
- (7) 川本サエ子 (1977) 井沢純・桜井芳平編著「道徳学習における人間性の追求 1. 名作編」明治図書 pp.80-87
- (8) 渡邊達生 (1990) 授業の本質に迫れなかったことはないか「ひしゃくぼし」「失敗の事例に学ぶ道徳の授業」〈1・2年〉新宮弘識・渡辺達生編 国土社 pp.141-149
- (9) 荻原隆 (1990) 話し合いがうわべだけで、深まらなかったことはないか「しあわせの王子」「失敗の事例に学ぶ道徳の授業」〈1・2年〉新宮弘識・渡辺達生編 国土社 pp.150-155
- (10) 小宮健 (1990) 子どもが資料の観念的な理解にとどまったことはないか「花さき山」「失敗の事例に学ぶ道徳の授業」〈3・4年〉新宮弘識・渡辺達生編 国土社 pp.126-131
- (11) 塚本充 (1990) ねらいからはずれた反応を示したことはないか「青のどう門」「失敗の事例に学ぶ道徳の授業」〈5・6年〉新宮弘識・渡辺達生編 国土社 pp.126-131

The State of Moral Education that Uses Teaching Materials Based on Feeling and Awe

Yoshimasa Fujita Koichi Hyotani

Osaka University of Comprehensive Children Education

The goal of this study is to examine the state of moral education that utilizes the characteristics of teaching materials based on feeling and awe. Compared to the past, voices emphasizing the difficulties in using moral education teaching materials based on feeling and awe for instructional purposes have become more prevalent. This is due to the drastic contrast between approaches. On one hand, most of the teaching materials that are created based on topics portraying the values of morality consider ethical issues that become behavioral criteria such as the moral assessment of matters and right versus wrong. On the other hand, moral education teaching materials based on feeling and awe portray the beauty of nature and the human heart through experiencing the aesthetics in being moved by this type of beauty or by embracing the emotion of awe. Specifically within materials that portray the beauty of the human heart, rather than trying to get students to imitate the behavior within those materials, it is best to construct a class that, through considering the motives behind behaviors, makes the students realize that there is more to simply losses and gains based on actions, and that humans desire this kind of beauty.

Key words : moral education, teaching materials, beauty, feeling and awe, emotions